



Embodiments of Constellation With Dedication to Spirits without names...

By Keijiro Suzuki



Embodiments of Constellation With Dedication to Spirits without names...

Duration: 16 minutes 46 seconds, 2013

Video + Installation

名もなき魂に捧げる星座を身にまとうこと...

16分46秒、2013年制作

ビデオ+インスタレーション

Embodiments of constellation with dedication to spirits without names... is a story by a man. It is a story of monologue with rituals. It reflects culture where he lives, the space of his mindscape. It is an amalgam of believes, speculations, perspectives, mythology and the universe that vaguely construct his world. The man is the source for all those stories, and vice versa. They relate to each other through associations, interpretations and imaginations that construct his world. Greek mythology, Shintoism, Japanese Manga, shadow puppet, forgotten cave drawings, a historical Moroccan traveler, visual cognition test and African fabrique among others are the references for this story. The intentional use and misuse of such meanings and references take you to the secret space of his allegory.

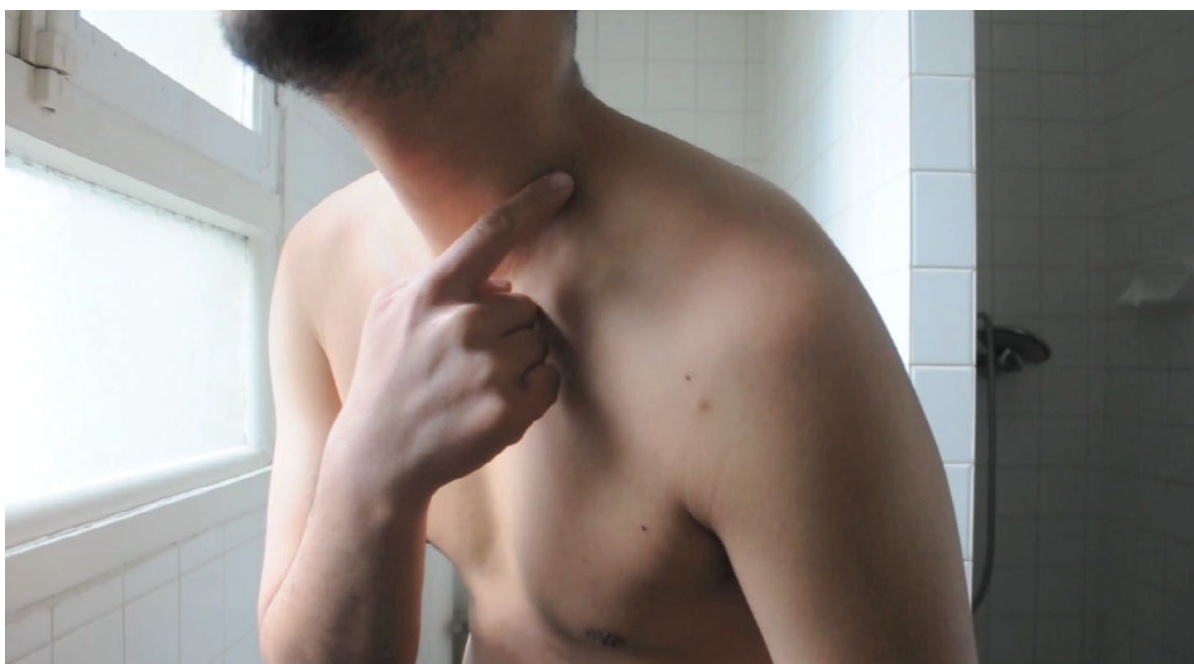
*This work was produced through the residence program at Cité Internationale des Arts, Paris, France

『名もなき魂に捧げる星座を身にまとうこと...』は、ある男による物語である。それは、儀式を伴った一人芝居。それは、彼が住んでいる文化、すなわち彼の精神世界という空間を反映する。それは、信仰、思索、視野、神話、そして、宇宙といった彼の世界を漠然と構成しているものの混合物である。その男は、それら全ての物語の根源であり、また、その逆も成立する。それらは、彼の世界を構成する関連性、解釈、そして、想像力を通してそれぞれに関係している。ギリシア神話、神道、日本の漫画、影絵、忘れ去られた洞窟壁画、歴史的なモロッコ旅行家、視覚認識テスト、アフリカの生地などが、この物語の参考資料となっている。そういった意味や参考資料を意図的に使用したり、非意図的に使用することで、彼の寓話的な秘密空間へあなたを連れて行く。

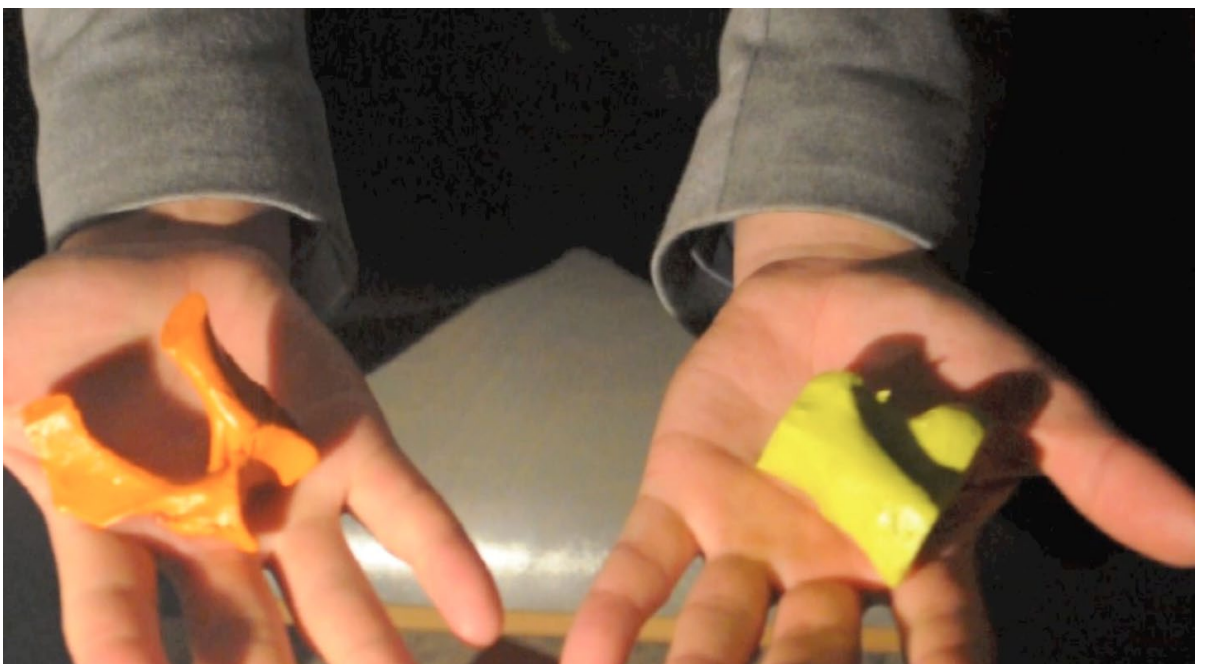
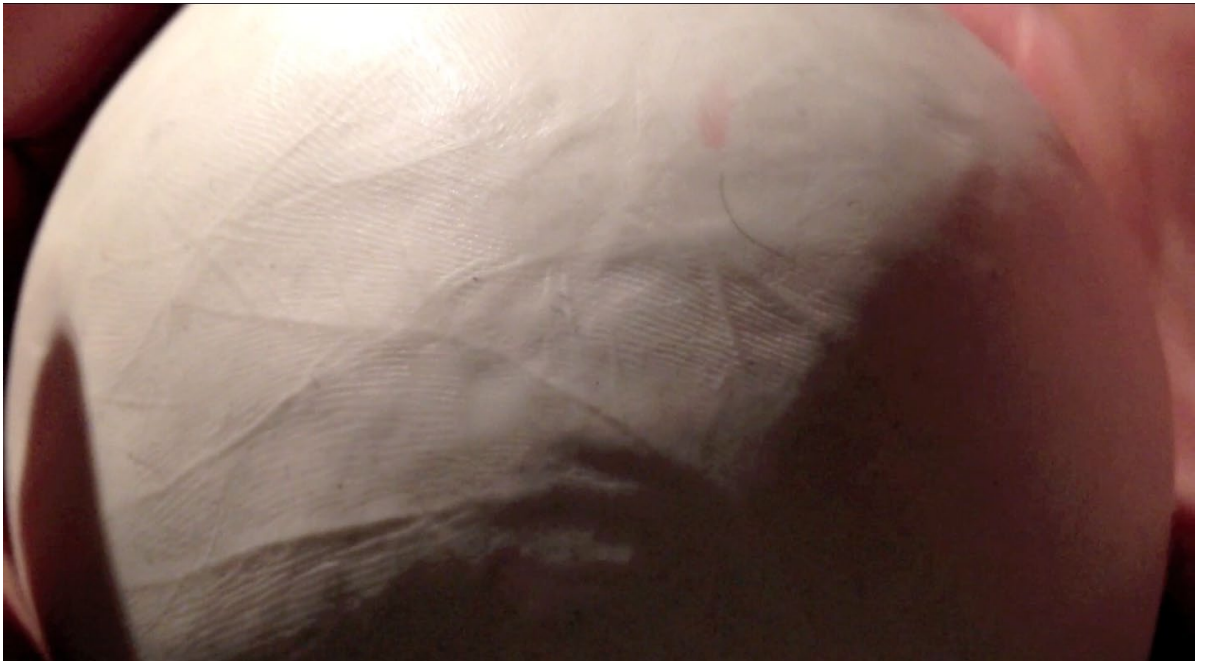
*この作品は、フランス、パリにある Cité Internationale des Arts での滞在制作を通して、制作されました。

Embodiments of Constellation

with dedication to spirits without names...

















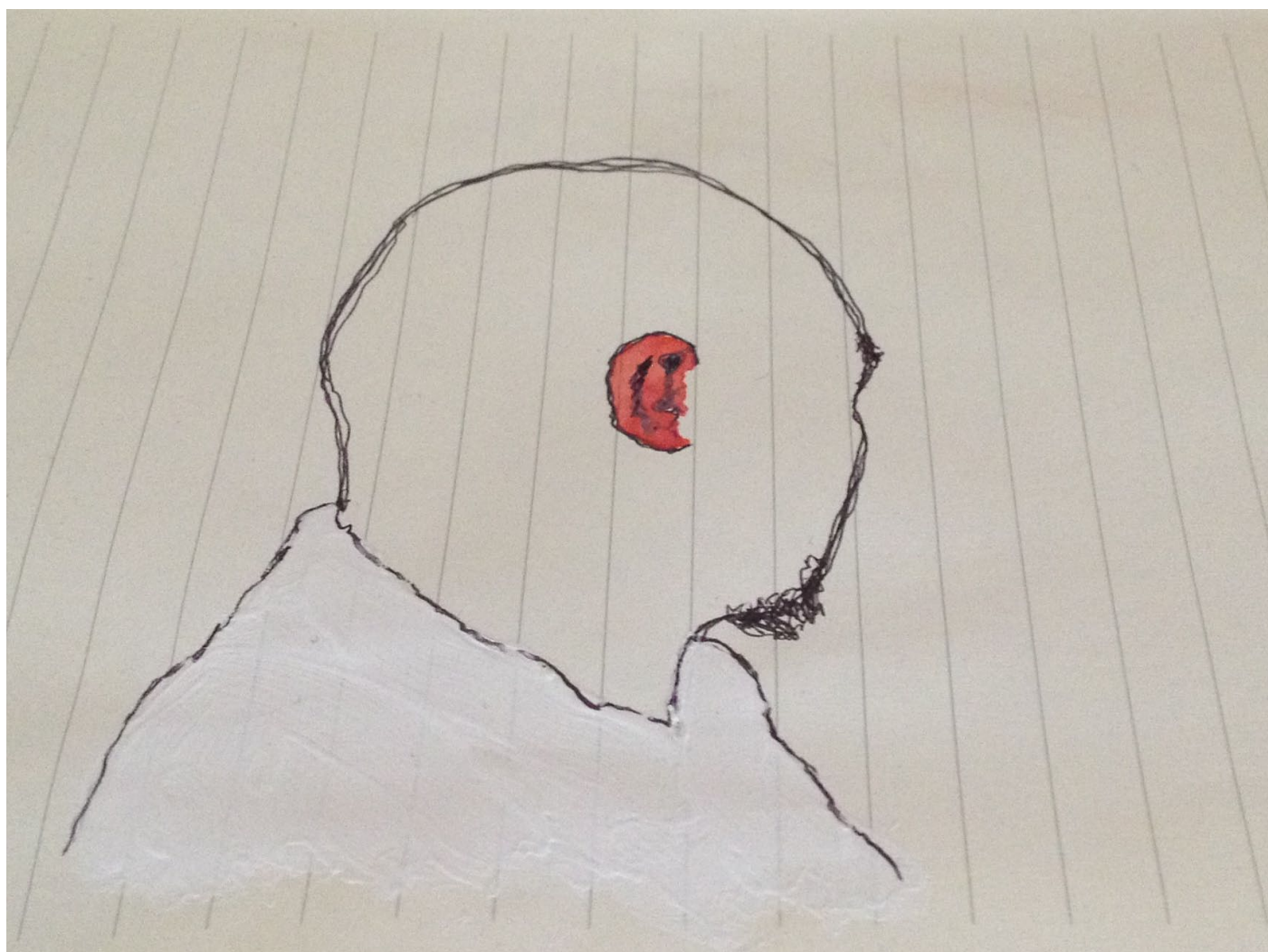


















Taurus
x
Guillemot















王様の命令

-付録-

未来の話です。あるところに王様がいました。この王様は、みんなから嫌われていました。なぜかというと、人々に命令ばかりするからでした。これまでに王様は、街の芸術家に、これまでに見たことのない美術品を作るようにいつも命令をしていました。それだけではなく、建築家にもこれまでに見たことのない建築を造るよう命令をしていました。また、それだけではなく洋服屋さんにもこれまでに見たことのない美しい衣装を作るようにと命令をしていました。また、また、それだけでなく、花屋さんにもこれまでに見たことのない美しい花束を作るように命令しました。また、また、また、それだけではなく、料理人にもこれまでに食べたことのないおいしい料理を作るように命令をしました。また、また、また、また、それだけではなく、音楽家にもこれまでにない音楽を作曲するように命令をしました。また、また、また、また、また、それだけではなく、劇作家にもこれまでに見たことのない劇を作るように命令をしました。毎日、毎日、みんな、これまでに見たことのないものを作るのに必死になっていました。作っても、作っても、王様は満足してくれないのです。

王様はある日、影絵を作る芸術家に会いました。この影絵を作る芸術家は、古くから伝わる物語を伝えることを仕事にしていました。あるとき、王様の前で、この影絵を作る芸術家が、洞窟についての話をしました。もちろん、洞窟なので、光がなければ、影も無く、静まり返った暗闇しかないところだと、話しました。王様は、日頃から光輝く生活をしていたので、洞窟の話を聞いた時には、あまり興味があるような素振りはありませんでした。この影絵を作る芸術家は、いつも反対の話をするのが得意でした。光を使って、影をつくることです。ただ、一つできないことがありました。それは、影を使って光を作ることでした。影からは、光が出ないのです。それは、月と地球と太陽の関係に似ています。太陽の光やそれぞれの位置関係、また、地球に遮断されて出来る影などによって、月はその存在を浮かびあがらせます。

この影絵を作る芸術家は、王様をワインの有名な国の洞窟へ招待しました。王様は、まだ、興味がないようでしたが、王様に命令されたので、この影絵を作る芸術家はそ

の命令を断れませんでした。そして、王様も命令したので、行かなければなりませんでした。このワインで有名な国の洞窟には、とても不思議な話がありました。人々を惑わすという噂です。一度入ると、どれが本物で、どれが偽物か分からなくなるそうです。その洞窟が、一つなのか、二つなのか、三つなのか誰も分かりません。なぜなら、この洞窟は、昔から大切にされて来たらしく、長い年月をかけて、一番昔からある洞窟を守るために、その地域の村人がそれと全く同じ洞窟を作ってしまったからでした。この洞窟を訪れる人は、どちらが本物か分からなくなるため、最終的に本当のことを知らない限り、一番古い洞窟へは行けません。そして、三つ目を作った理由も同じで、二つ目がだいぶ古くなって来てしまったので、一番新しいのだけれど、一番古い洞窟と見た目に全く同様のものを再現したという噂でした。

昔、この一番古い洞窟では、動物を捕まえるための儀式が行われていたといううわさです。この街の誰一人、それが本当かどうか知りませんでした。ただ、そういった噂をみんなが日頃から、話していたので、みんなそうだと信じて噂をしていました。実際に、王様も聞いたことはあったようですが、見たことはありませんでした。この王様は、影絵を作る芸術家について、このワインで有名な国にあるこの洞窟へ入って行きました。影絵を作る芸術家が、光を操って先導してくれるので、王様は安心して着いて行くことが出来ました。

だんだん、奥に入って行くと、この芸術家のもつ光が際立って輝く場所に到着しました。そして、そこは空気の音も聞こえる場所でした。この影絵を作る芸術家は、目的地に来たことを確認すると、一度、光を隠してしまうことにしました。王様は、不慣れな場所で光がないので、心細く、いつもよりも臆病になりました。

影絵を作る芸術家は、何か知った素振りで、準備に取りかかりました。日が昇るよりも早くに王様の城を出てから数時間が経った頃でした。ただ、王様は初めて来た洞窟の中でとても不安なため、時間の感覚すら忘れてしまっていました。この影絵を作る芸術家は、自分のこと以外は、全て知っていました。ただ、なぜ影絵を作るのか、な

ぜ影が出来るのか、なぜ自分が存在しているのかという『自分』についてのことはよく知りませんでした。ただ、影絵を作ることには高い評判がありました。準備をし始めてから、しばらくして、王様の目の前に何かうっすらと浮かび上がり始めました。とても、うっすらとしか見えないので、それが影絵なのか錯覚なのかさえ分かりませんでした。もしくは、この影絵をつくる芸術家が光を消してから、しばらく経ったので、目が暗闇になれて来たせいなのかも知りませんでした。

王様は、それをうっすらと、そして、ぼんやりと見ていました。回りには、空気の音以外は、特に何も感じられません。不安になりましたが、王様は今までに見たことがないものに見られるという期待があったので、しっかり見ようと目を開き続けました。しばらくして、影絵を作る芸術家の声が聞こえたように思いました。その声に意識を集中してみると、どうも物語が始まったようでした。影絵を作る芸術家は、洞窟の中に閉じ込められた人々の話をし始めました。洞窟の中に閉じ込められた人々は、洞窟から一步も出ずに育ったので、光り輝く美しいものなど、見たことがありませんでした。芸術品、装飾品、美しい自然、おいしい食べ物など、どれも創造をすることすら出来ませんでした。もちろん、今までに見たこのない芸術品など一切創造すら出来ません。なぜなら、彼らにとって、存在しない創造の中の創造だからです。

影絵を作る芸術家は続けて、洞窟で育った人々にとっては、今までに見たことのないものばかりで、今までに見たことのない芸術品という意味すら分からないのだと説明しました。なぜなら、彼らは毎日、毎日、洞窟の奥底で、洞窟に流れ込んでくる空気を食べ、儀式に没頭して生活してきたからです。彼らの儀式というのは、真っ暗闇の中で、頭に浮かび上がる形を壁になぞり描くという技法でした。洞窟で育った人々は、それらを実際に見たことはなく、頭に浮かぶまま描き続けるだけでした。

王様は、うっすらと浮かび上がるこの洞窟で育った人々の話の影絵を見ながら、その影絵に出てくる形を注意深く見ました。王様はふと気づきました。この洞窟で育った人々達が描きあげているものは、王様のお城の回りに住んでいる動物や王様のもって

いる動物園で見る他の国から来た動物達でした。

王様がもっと注意深く見ていると、王様は他の何かにも気づきました。それは、いつも見たがっていた今までに見たことのないものでした。それは、いくつかありました。一つは、丸い二重丸から放射線状に線がいくつもでているもの。ただ、それは十二分割されているようでした。また、他の形は、先が尖った細長いものが合わさった形で、この二重丸の方をさしていました。

この影絵を作る芸術家は、この洞窟で育った人々の描く絵の話をし始めました。王様は、興味深く話を聞き始めました。この洞窟で育った人々は、実は、これらが実在すると知って書いていた訳ではないということでした。ただ、これらの絵や形は、長い時をかけて、王様の住む光り輝く世界の動物やその他の今までに見たことのないものになっていったということでした。王様には、この話が理解できませんでした。それは、洞窟で育った人々が、王様が知っている光り輝く世界の意味が分からないのと同じようなことでした。

影絵を作る芸術家は、続けて話しました。実は、この洞窟で育った人々の中の一人が実は、黙って逃げ出し、王様の知っているような光り輝く世界を見てしまったと。彼は、光り輝く世界の芸術品、建築、衣装、料理、花束、音楽、劇など、見るもの全てに魅了されました。そして、彼はそれを記憶に収め、こっそりと洞窟に戻って来てしまいました。

彼がこっそりと戻って来て、またすぐに儀式が行われました。洞窟で育った人々は、いつも通り、絵を描き出して行きました。洞窟で育った人々は、普段通り、それらが何か分からないまま、描き続けました。ただ、王様にはそれらが何なのか明白でした。その中で、光り輝く世界を見てしまった彼も何かを描いていました。王様の目には、洞窟で育った人々が描く形を全て理解できたのに、この光り輝く世界を見てしまった彼の描くものだけは、いったい何なのか分かりませんでした。影絵を作る芸術家

の話の中で、唯一、この光り輝く世界を見てしまった彼の描き出す絵だけは、王様には全く理解できませんでした。影絵を作る芸術家は、話を続けました。

洞窟で育った人々も、この彼が描き出す絵がどうも洞窟の世界になじまないと肌で感じはじめました。それどころか、彼の描き出す絵は、儀式の邪魔になるのが分かりました。洞窟で育った人々は、ある時、だまってこの光り輝く世界を見て戻って来てしまった彼に赤ワインを飲ませ、酔っぱらいにしてみました。そして、彼が酔っぱらっている間に、彼の頭を身体から離し、頭だけを洞窟に残して、どこへも行けなくしてみました。身体の方は、洞窟から放り出され、光り輝く世界に捨てられてしまいました。。。

と、影絵を作る芸術家は、この洞窟で育った人々の話を終えました。影絵を作る芸術家は、王様にその話の余韻を噛み締めてもらうために、静かにその場を離れ、息を殺して、隠れました。

しばらく沈黙が続き、王様の呼吸する音だけが洞窟に聞こえました。王様も、自分の息の音だけが聞こえているのに気づきました。洞窟の中の空気の音はもう無くなってしまっていました。影絵を作る芸術家は、そこで言いました。実は、この洞窟で育った人々は、空気を食べて生活していたので、今、空気の音が聞こえなくなったとおり、空気を全て食べ尽くしてしまい死んでしまったと話しました。

王様は、恐ろしくなりました。影絵の中の話だと思っていたのに、まるで王様の身の回りで起こっているように思えて来たからです。実際のところ、王様も息苦しくなり、意識が朦朧として来ました。まさしく、この洞窟の空気も無くなってきてしまったのでした。空気が食べ尽くされたのか、空気が無くなるとともに、影絵を照らしていた光も影絵も、消え去って行きました。

ただ、それと同時に、王様が影絵の話を聞いている間に、日が昇り、洞窟に光が差し込んで出来たのか、王様の目は実はすでに影絵ではなく、この洞窟で実際に描かれた

壁画を、実際に自分の目で見ていたことに気づきました。そして、王様がまさに意識を失う前に、あの光り輝く世界を見て帰って来た彼が描いた絵の意味が分かった気がしました。二重丸に放射線状にでている十二分割する線と、先が尖った細長い形が三つ組み合わされたもの。王様は、声を出すことさえ出来ませんでした。ただ、その代わりに影絵を作る芸術家が声を出して、その答えを伝えました。それは、王様を乗せて、太陽へ向けて発射される宇宙船だと。そして、その宇宙船は、夜空を駆け巡り、光り輝く世界の太陽にぶつかって破裂し、閃光を放ちながら、太陽の光の届かない夜空へ、満月の光とともに光り放つのだと。影絵を作る芸術家はそう語り、洞窟から去って行きました。

街に戻ると王様の命令で、毎日、毎日、悩まされていた芸術家、建築家、洋服屋、花屋、料理人、音楽家、劇作家は、王様の命令に従わず、自由に作品制作を続けることが出来るようになったということです。そして、街は今までに見たことのないものではなく、今までに見たことのあるものばかりがあふれかえるようになってしまいましたとき。

